

(別紙様式第3号)

論 文 要 旨

論 文 題 目

Effects of anti-stigma-focused lecture on recognition
of depression and its treatments among medical and
non-medical university students

(医学部1年生、4年生および他学部生に対する
うつ病啓発講演前後の意識調査)

氏 名 諸 久 厚 弘






【	目	的	】	医	学	専	門	教	育	(気	分	障	害	に	関	す	る	講	
義)	を	受	講	前	の	医	学	部	1	年	生	(M1)	、	受	講	済	の
医	学	部	4	年	生	(M4)	、	お	よ	び	医	学	部	以	外	に	所	属
す	る	1	年	次	学	生	(X1)	を	対	象	に	、	同	一	内	容	の	
う	つ	病	啓	発	講	演	を	行	い	、	う	つ	病	に	対	す	る	認	識	
お	よ	び	対	応	に	関	す	る	講	演	前	後	の	意	識	の	変	化	に	
つ	い	て	調	査	し	、	比	較	検	討	を	行	っ	た	。					
【	方	法	】	本	研	究	に	同	意	の	得	ら	れ	た	M1	群	97	名	、	
M4	群	89	名	、	X1	群	99	名	を	対	象	と	し	、	啓	発	講	演	前	
後	に	質	問	紙	表	に	よ	る	調	査	を	行	っ	た	。	質	問	項	目	
は	、	恐	怖	、	知	識	不	足	、	性	格	面	の	弱	さ	、	羞	恥	、	
罪	惡	感	、	現	実	逃	避	、	自	覚	へ	の	過	信	、	自	己	制	御	
へ	の	過	信	、	な	ど	8	項	目	の	疾	患	へ	の	偏	見	を	5	段	
階	評	価	し	、	さ	ら	に	、	対	応	・	治	療	に	関	す	る	認	識	
と	し	て	、	自	発	的	援	助	希	求	、	家	族	相	談	、	一	般	医	
受	診	、	精	神	科	受	診	、	カ	ウ	ン	セ	リ	ン	グ	の	役	割	、	
薬	物	療	法	の	必	要	性	、	依	存	の	リ	ス	ク	、	薬	物	効	果	
発	現	時	期	、	再	発	予	防	効	果	、	家	族	の	対	応	、	に	関	
す	る	10	項	目	を	5	段	階	評	価	し	た	。	3	群	間	の	差	異	
は	ANOVA	お	よ	び	Tukey test	に	よ	り	検	討	し	、	p<0.05	を	有					

意	と	し	た	。																
【	結	果	】	講	演	前	の	う	つ	病	へ	の	認	識	に	つ	い	て	は	、
M4	群	で	恐	怖	、	知	識	不	足	、	自	己	制	御	へ	の	過	信	の	
3	項	目	の	偏	見	が	最	も	少	な	く	、	対	応	に	関	す	る	認	
識	に	つ	い	て	は	、	薬	物	の	効	果	発	現	時	期	、	再	発	予	
防	効	果	、	家	族	の	対	応	の	3	項	目	で	最	も	優	れ	て	い	
た	が	、	M1	－	X1	群	間	に	は	ほ	と	ん	ど	差	は	な	か	っ	た	。
講	演	後	も	、	過	半	数	の	項	目	に	お	い	て	M4	群	が	優	位	
な	認	識	を	保	っ	て	い	た	が	、	X1	群	は	カ	ウ	ン	セ	リ	ン	
グ	、	薬	物	療	法	お	よ	び	家	族	対	応	な	ど	の	う	つ	病	治	
療	に	関	わ	る	項	目	に	お	い	て	M1	・	M4	群	よ	り	も	有	意	
に	啓	発	効	果	が	低	か	っ	た	。										
【	考	察	】	M4	群	で	は	専	門	教	育	と	啓	発	講	演	の	相	加	
作	用	に	よ	り	、	う	つ	病	の	疾	患	認	識	/	治	療	対	応	に	
関	す	る	正	確	な	情	報	を	獲	得	し	や	す	い	こ	と	が	判	明	
し	た	。	一	方	、	X1	群	に	お	い	て	は	、	う	つ	病	治	療	の	
実	際	に	対	す	る	認	識	が	深	ま	り	に	く	く	、	同	じ	く	専	
門	知	識	を	持	た	な	い	M1	群	と	の	間	に	も	差	を	認	め	、	
知	識	獲	得	へ	の	動	機	付	け	の	強	さ	の	違	い	に	起	因	す	
る	も	の	と	考	え	ら	れ	た	。								(805	字)	

平成 24 年 11 月 7 日

(別紙様式第 7 号)

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

報 告 番 号	課程博 * 第 号 論文博	氏 名	譜久原 弘
論 文 審 査 委 員	審 査 日	平 成 24 年 11 月 7 日	
	主 査 教 授	青 木 一 雄 	
	副 査 教 授	宮 崎 哲 次 	
	副 査 教 授	松 下 正 之 	
(論 文 題 目)			
Effects of anti-stigma-focused lecture on recognition of depression and its treatments among medical and non-medical university students (医学科学生および他学部生に対するうつ病啓発講演前後の意識調査)			
(論文審査結果の要旨)			
上記論文に関して、研究に至る背景と目的、研究内容、研究成果の意義、学術的水準につき慎重に検討し、以下のような審査結果を得た。			
1. 研究の背景と目的			
日本の自殺者数は 1998 年以来、年間 3 万人を超えて推移しており、自殺の重要因子であるうつ病・うつ状態をターゲットにしたメディカルモデルの自殺予防対策が重視されている。プライマリ・ケア医がうつ病の早期診断・早期治療を行うことで、自殺率が減少したという報告もあり、医学部生に対し早期からうつ病や自殺予防に関する教育を行うことが、自殺予防への能動参加につながると期待される。			
今回の研究では、琉球大学において他学部 1 年、医学部 1 年、医学部 4 年の三群に対して、啓発講演を行い、講演前後で「うつ病に対する偏見」や「対応・治療に関する誤解」についての意識調査を行った。また、三群間の比較により、講演への「動機付け」の強さやうつ病に関する「予備知識」が啓発効果に与える影響についても同時に検討した。			
2. 研究内容			
対象は、他学部 1 年 193 名、医学部 1 年 203 名、医学部 4 年 160 名（気分障害の系統講義受講済）を対象に行った。講義は、偏見と誤解が持たれやすい項目の改善に焦点化した標的化講演で、同一の資料・時間・講師にて実施した。意識調査は、講演前後に質問紙表にて行			

い、「うつ病に対する偏見」の 8 項目、「対応・治療に関する誤解」の 10 項目について調査した。

その結果、大学生間でも、「動機付け」や「予備知識」の違いで啓発効果は異なり、改善度は、医学部 4 年次 > 医学部 1 年次 > 他学部 1 年次 の順となった。医学部 4 年ではうつ病をメディカルモデルとして捉えており、うつ病に対する「恐怖感」は少なく、「病識を失う疾患」と正しく認識しており、治療における「薬物療法」と「カウンセリング」についても妥当に認識していた。うつ病への「罪悪感」と「家族への相談希求の低さ」に関しては、三群に共通した特徴であった。他学部生を対象とした啓発は、うつ病にまつわる恐れや罪悪感を払拭し、病識を失う可能性を理解させ、自己制御から援助希求への転換を促すなど、メディカルモデルへの親和性を高める工夫が必要であることが示された。

3. 研究成果の意義と学術的水準

本研究によって、①1 回の講演でも一定の啓発効果が得られる ②医学部 4 年、医学部 1 年、他学部 1 年の順で高い啓発効果が認められる ③予備知識があると認識は深まりやすい ④医学知識獲得への動機付けの違いで啓発効果が異なる、以上 4 点のことが明らかにされた。本研究によって、医学部生に対し早期からうつ病や自殺予防の教育を行うことが重要であることが示唆され、学術的な意義は高いと考えられる。

以上より、本論文は学位授与に十分に値すると判断した。

- 備 考
- 1 用紙の規格は、A 4 とし縦にして左横書きとすること。
 - 2 要旨は 800 字～1200 字以内にまとめること。
 - 3 *印は記入しないこと。